

【論文】

授業実践力を高める教育実習を基盤とした教職実践演習†

—協働的な学びによる授業の改善と実践を通して—

永田 成文*

三重大学教育学部社会科教育講座*

2013年度の社会科教育コース(幼・小)を対象とした教職実践演習では、教育実習で実施した授業を改善し、学生が協力校において授業を実施した。本研究の目的は、授業実践力を高めるという視点から、教育実習を基盤とした教職実践演習の有効性を検証することである。

まず、3年次に社会科教育コースの学生の1人が教育実習で実施した授業を取り上げ、それをもとに9名の受講生は、主な教材や学習過程を変えない範囲で指導案を改善した。次に、改善した指導案を発表し、その内容から4チームをつくり、チームで話し合っ一つの指導案にまとめた。

さらに、チームごとに模擬授業を行い、よりよい授業となるように学生同士で討論した。協力校において授業を実践後、学生は協力校の教員から授業に対するアドバイスを受けた。

アンケートや振り返りシートの結果から、協働的な学びによる授業の改善と実践を通じた教育実習を基盤とした教職実践演習は、学生の授業実践力をさらに高めることが明らかになった。

キーワード：教職実践演習，授業実践力，教育実習，改善授業，協働的な学び

1. はじめに

教職実践演習は、教員として必要な知識技能が修得できているのかを確認することを目的として、2013年度から大学の教員養成学部・学科を中心に実施されるようになった。中央教育審議会答申(2006)では、教職実践演習の授業内容として、①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項が、授業方法として、役割演技、グループ討議、事例研究、現地調査、模擬授業等が、学外との連携先として、現職教員の授業や学校や教育委員会が示されている。

三重大学教育学部は学部目標の一つに、児童・生徒理解、教科指導、授業運営と関連づけて、教育現場における最も重要な課題を克服する力である教育実践力の養成を掲げている。教育学部の学生は、4年間の教員養成教育の中で、教育現場で活用できる実践的な講義や教育現場での実践的な体験の機会など、教科の専門性を授業に活用する手法を学んだり、授業における児童・生徒の様子を観察したり、実際に授業を行うことを要望している¹⁾。渡辺(2011)は、現場の児童・生徒は、教員養成教育後の教員に対して学業面の指導を第一に期待していると述べている。学生や児童・生徒の要望から、教科の専門性を踏まえて授業を構想し、教育現場で授業を実践する力は新任教員として特に身につけておきたい資質といえる。

藤田・永田・川端(2010)は、教科について、関連する学問に一定レベル以上の実力をもつという教員養成を使命とする教育学部における独自の概念であるとし、「教員が子どもたちの教科に対する好奇心や興味を呼び起こす力」を教科力と規定している。長友・中込・生野(2010)は、教材研究、学習指導案・板書計画・発問計画・作業のプリント・教材等の作成による授業設計により、授業実施にいたる一連のことを学生に体験させることによって実践的指導力を育成できるとしている。教科力は、教材を作成し、系統的な発問を考えるなど授業設計を行う力に相当する。教員をめざす学生は、教科力を生かして作成した学習指導案に基づき、授業の中で児童・生徒と対話し、様々な授業展開に適宜対応し、時間配分を考えて一つの方向性にまとめるという授業運営を行う力が求められる。

本研究では、授業設計力と授業運営力から構成される実践的指導力を授業実践力と定義し²⁾、教育実習を基盤とした教育現場での授業実践を核とする教職実践演習を提案し、授業実践力を高めるという視点からその有効性を検証することを目的としている。

研究の方法として、まず、教育実習を基盤とした授業実践を核に据えた先行プログラムの課題を踏まえ、より学生の授業実践力を高める教職実践演習のプログラムを提案する。次に、提案した教職実践演習を受講した学生の授業実践力の高まりについて、アンケートや振り返りシートにより分析し、プログラムの評価を行う。

2. 教育実習を基盤とした授業の改善と実践

2. 1. 教育実習を基盤とする必要性

三重大学教育学部では、学生は1年次に教育現場の雰囲気をつかむために教育実地研究基礎(1単位)を履修し、2年次に事前実習として3年次の教育実習を1日参観し、3年次に主免の教育実習(4週間)、4年次に副免の教育実習(2週間)を行うようになっている。4年次後期に位置づけられている教職実践演習では、4年次前期までの学生が培った学びを生かして、さらに授業実践力を高めることが求められる。

三重大学教育学部の大半の学生は教育学部附属学校で教育実習を行う。附属学校の教育実習では、学習指導案の書き方と大枠の授業構成があらかじめ学生に示されている。また、児童・生徒は発表の仕方等についても普通の授業で訓練されている。附属学校の実習生は、教員によりある程度形成された教育環境の中で授業設計力や授業運営力を育成していくことになる。教員を希望するほとんどの学生の就職先は公立学校となる。附属学校と比較して、公立学校の授業実践は教員の自由裁量が大きくなるため、学生はこのような教育環境の中でも経験を積むことが望ましい。

附属学校と公立学校のどちらに教育実習を行った場合でも、学生は限られた時間の中で、複数回の授業を計画し、実践する。学生は毎日の授業実践に追われるため、各時間の授業について入念な教材研究が不足し、授業の反省が不十分でやりっ放しになっていることが多い。また、他の実習生やクラス担当教員が加わる授業後の反省会等では、教材や発問を通した児童・生徒への対話や授業展開を踏まえた対応など授業運営に関わることが話題の中心となることが多い。特に小学校実習の場合、他の実習生やクラス担当教員は学生が授業を行った教科を専門にしていることも多く、反省会等で一般的な教材研究のあり方や児童への対話や対応が話題となる傾向が強い。授業運営は授業設計を基盤としている。学生は所属するコースで培ってきた教科力をもとに、入念な授業設計のもとで授業を行い、授業実践力について反省を行う経験を積みたい。

附属学校や協力校である公立学校における教育実習では、一般的に担当するクラスの授業は学生が個人で計画し、実践し、反省する。このため、複数の学生で授業設計の吟味を行うことや、他学生の同じ教科の内容の授業について、自己の授業と比較考察することが難しい。特に小学校を主免とする学生は、将来様々な教科を担当することが求められる。まずは一つの教科にターゲットを絞り、より授業の質を高めるために、該当教科を専門とする学生との学び合いを取り入れたい。

教育実習において、学生は授業を実践し、主に授業実践力がついたかについての反省を行う。しかし、教育実習後は授業実践から遠ざかっている学生が多い。教育実習後に学生の授業実践力を高める手立ての一つとして、学生同士の学び合いによる入念な授業設計を踏まえて、協力して授業を実践することが考えられる。すなわち学生の協働的な学びによる授業設計と実践である。

2. 2. 先行プログラムの課題

三重大学教育学部社会科教育講座では、地域連携の一環として、三重大学教育学部の協力校である津市立西が丘小学校において、2010年度から3年次と4年次の教育実習の両方を経験した学生が授業を行っている³⁾。これは、教育実習で培った授業実践力を基盤として、学生が公立学校の担当学年の児童を想定して授業設計を行い、教材と発問から児童との対話を中心に授業運営を行う授業実践を核に据えた一連のプログラムとなっている。

2010年度は、協力校である西が丘小学校から3年生「店で物を売る人の工夫」の授業の依頼があった。3年次教育実習で地域の商店街の小単元を実践した社会科教育コースの4年次学生が、筆者の指導のもとで、小単元の内容の中から要請されたテーマに合致した1時間の内容に再構成し⁴⁾、授業を行った。

2011年度は、西が丘小学校から4年生「地域の発展に尽くした先人」の授業の依頼があり、地域の歴史について卒業論文で研究している社会科教育コースの4年次学生が、筆者の指導のもとで新たに1時間の授業を開発し、授業を行った。

両実践とも学生1人が2日で4クラスの授業を行った。筆者は各授業ごとに教材の提示方法や間合いの取り方などのアドバイスをを行い、各クラスの担任教員は感想を学生に伝えた。学生は、毎時の授業における反省を次時の授業に生かすことができた。永田(2012)は、2010年度の先行プログラムを教科教育の専門性を生かした社会科地域学習の実践、2011年度の先行プログラムを教科内容の専門性を生かした社会科の実践と位置づけた。また、先行プログラムにおいて、それぞれの学生の授業実践力が育成されたことを示した。

前者は、学生は教育実習の経験を基盤として、3年生の児童への対応をイメージして、1時間の授業を再構成することができた。後者は学生が新たに授業を開発する必要があったため、4年生の児童との具体的な対応のイメージができず、授業の開発で手一杯となった。授業実践力を高める視点から考えると、前者のように教育実習を基盤とした方が、教育実習時の反省を踏まえることができるため、より授業実践力の高まりを意識できる。

両実践は、学生が1人で授業を計画、遂行したため1時間毎に授業の改善を図ることができるというメリットがあったが、授業計画の吟味が不十分であった。また、授業実践後に担任教員のアドバイスが不十分であった。このため、学生同士の学び合いの場を設定し、担任教員との反省会を充実させるなど、より客観的に授業を設計し、授業を省察することが必要であった。

2012年度は、協力校である西が丘小学校から小学校6年生に幕末以降の授業を行ってほしいという依頼があった。そこで、社会科教育コースの学生が3年次教育実習で開発した幕末の小単元の中から黒船来航の1時間の授業に着目した。4年次となった学生の6名が、6年生の4クラスで共通で使用する主発問と教材を決め、その他は担当する学生が各自で工夫するという設定で、筆者の指導のもとで授業を改善した。学生はお互いに話し合いながらそれぞれ指導案を作成し、学生1人が1クラスを担当して授業を行った⁵⁾。

学生はお互いの授業を参観することで、授業設計力と授業運営力という観点から自己が担当したクラスの授業と他学生が担当した他クラスの授業を比較することができた。また、授業後に、筆者と学生と各クラスの担任教員を交えた反省会をもつことで、学生は担任教員から時間配分や資料提示の仕方という状況に応じた児童への対応や児童の発言に対する受け答えなど、対話に関わるコミュニケーション能力の必要性を改めて学ぶことができた。しかし、学生1人ひとりが4クラスで個々の指導案を作成して授業を行ったこと、2010年度や2011年度と同様に正規の授業に位置づけていなかったことから、個々の指導案に対する学生同士の学び合いや、4つの指導案を比較することによる学び合いが不足していた。換言すれば、より学生の協働的な学びが保障される設定が

必要であった。

2010年度から2012年度までの教職実践演習を見据えた先行プログラムの分析から、教育実習を基盤とした授業実践力を高める教職実践演習では、教育実習で実践した授業について複数の学生の視点から再考し、お互いの授業を比較して磨き合い、様々な教育環境の中で改善した授業を実践し、現場の教員と省察するなど、より協働的な学びが求められることがわかった。

3. 教職実践演習(幼・小)の内容と方法

3. 1. 教職実践演習(幼・小)の構成

三重大学教育学部の教職実践演習は、5回分を教職担当の教員、10回分を各教科の教員が担当する。社会科教育コースに所属する学生は、進路に応じて教職実践演習の幼・小と中・高のプログラムを選択し、教科力を生かして専門性を高めるようになっている⁶⁾。

教育実習後の授業実践を核に据えた事前プログラムの課題を踏まえて、2013年度の社会科教育コースの教職実践演習(幼・小)を構成した。小学校を主免とする教育学部生6名と中・高等学校を主免とする人文学部生3名が受講した⁷⁾。10月からの5回の教職共通の授業の前の7月～9月に集中的実施した(表1参照)。教職共通の授業後に、社会幼小の振り返りを行った。

社会幼小の10回では、まず、受講生の1人が3年次の教育実習で開発した小単元を基に、数時間分の内容から授業で行う1時間分を受講生全体で決める。該当する内容の授業を開発し、学生の学び合いを踏まえた改善授業を実施する。具体的には、小単元の実践者の授業の意図と反省を全体で共有させ、受講生を協力校の該当学年のクラス数分のチームに分け、各チームは協働して指導案を作り、模擬授業を行う。

表1 2013年度の社会科教育コース教職実践演習(幼・小)の概要

2013. 7.24(水)	1回目: 【社会幼小】 対象となる教育実習時の社会科指導案の紹介⇒改善指導案づくり
2013. 8.29(木)	2回目: 【社会幼小】 改善指導案の検討・チーム形成⇒チーム指導案づくり
2013. 9.12(木)	3回目: 【社会幼小】 模擬授業の実施・指導案の検討
	4回目: 【社会幼小】 最終指導案づくり
2013. 9.24(火)	5回目: 【社会幼小】 授業実践Ⅰ(Aチーム授業)※B・C・Dチーム参観, 授業の振り返り
	6回目: 【社会幼小】 授業実践Ⅱ(Bチーム授業)※A・C・Dチーム参観, 授業の振り返り
	7回目: 【社会幼小】 授業実践Ⅲ(Cチーム授業)※A・B・Dチーム参観, 授業の振り返り
	8回目: 【社会幼小】 授業実践Ⅳ(Dチーム授業)※A・B・Cチーム参観, 授業の振り返り
	9回目: 【社会幼小】 学生と協力校教員との授業実践の反省会
2013.10. 2(水)	1回目: 【教職共通】 教育実践演習の目的(教員A) ※教職実践演習受講者全員
2013.10. 9(水)	2回目: 【教職共通】 自己価値観を高める働きかけ(教員B) ※1/4の中グループで実施
2013.10.16(水)	3回目: 【教職共通】 コミュニケーション(教員C) ※1/4の中グループで実施
2013.10.23(水)	4回目: 【教職共通】 教育課程編成(教員D) ※1/4の中グループで実施
2013.10.30(水)	5回目: 【教職共通】 発達・学習をめぐる問題と教師(教員E) ※1/4の中グループで実施
2013.11.13(水)	10回目: 【社会幼小】 社会科教育コース(幼・小)の振り返り

※教職共通の2回目から5回目は教職実践演習受講者全員を4つのグループに分け、教員B～Eの講義をローターで受講した。

模擬授業では、各チームは現場の児童への対応を想定した。他チームは児童役となり、授業後にアドバイスをす。チーム内とチーム間でお互いに授業を磨き合うことで最終指導案を作成する。各チームは協力校で授業を行い、他チームの授業を参観する。受講生は、自チームと他チームの実践授業を比較することで、自己の授業設計力や授業運営力に着目していくことができる。

3. 2. 教育実習における授業実践の課題

筆者は2012年度に、2013年度の教職実践演習(幼・小)の受講生の1人(以降「学生X」と表記)が附属小学校の教育実習で開発した小単元「みんなで取り組む交通安全」(8h)の第7時「模擬体験を通して交通安全について考える」を特練授業(本時)として参観した(表2参照)。この小単元は、社会科第3・4学年の「地域の安全を守る活動」の内容に該当する。

長谷川(2006)は、この単元について、地域の人々の安全を守る意識を育て、自分も地域住民の一人として交通安全活動などに積極的に参加し、協力する態度を育てることが大事であると述べている。また、児童に社会科としての問題をもたせ、ねらいを達成できる素材を準備しなければならない(片上・柳下編 2008)。

本時は、交通事故が起きている原因を考えるための模擬体験が中核に位置づけられていた。ダンボールで作った自動車2台を準備して、児童が中に入って自動車の死角を確かめる模擬体験である。児童1人ひとり1分間しか体験できず、19分間は自動車の外からただ友達の体験の様子を見る活動となっていた。この活動を中核として、受講生が授業を改善し、授業を実践すれば授業実践力が高まると考え、2013年度は筆者から西が丘小学校に、この本時の授業実践を依頼した。

表2 小単元「みんなで取り組む交通安全」

第一次：身近なマルヤス前交差点から交通安全を考える。3時間
・なぜマルヤス前で事故が多いのか、事故に対する対策はされていないのかについて話し合う。(1) ・マルヤス前交差点を調べる。(1) ・調べてわかったこと、考えたことを話し合う。(1)
第二次：自分たちを守っている人の活動について知る。2時間
・交通安全に関わる人々がいることを知る。(1) ・交通安全に関わる機関の活動について知る。(1)
第三次：事故が起きている原因について考える。2時間
・歩行者側の視点で考える。(1) ・自動車側の視点で考える。(1)(本時：特練)
第四次：自分達にできる交通事故を防ぐ方法を考える。1時間

※()は時数を示す。学生Xの教育実習の指導案より作成

3. 3. 教育実習を踏まえた協働的な学び

教職実践演習の1回目は、受講生9名を、4チームに分け、各チームが担当クラスでTTにより授業を行うことを伝えた。具体的には、小単元「みんなで取り組む交通安全」の特練で行った本時の授業を改善して実践することを説明した。まず、教育実習時に小単元を開発して実践した学生に、学習指導案の概要説明と模擬体験活動の反省点を述べさせた。教育実習時の成果と課題について受講生全員が共通認識できた。次回までに、受講生全員に改善指導案を考えてくるように指示し、学生Xの教育実習時の課題を克服する改善授業を協力校で実施することを意識づけた。

2回目は、受講生全員に学生Xの教育実習時の指導案のどの部分を改善したのか、ダンボール自動車を中心とする教材をどのように活用するのかを中心に改善指導案を発表させた。受講生の話し合いで、改善の趣旨が似ている3人・2人・2人・2人の4チームが結成された。また、受講生に自動車2台、横断歩道、信号機、交通安全ビデオは4チームで共通して授業で取り上げる教材として決定させ、1時間の授業における共通する活動を確定させた。黒板に貼る図表やワークシートは各チームで作成することを伝え、チームごとに授業のオリジナリティを出させようとした。児童の興味・関心がわくように西が丘小学校区と4年生の発達段階を意識するように促した。次回までに、チームで一つの指導案を作成するように指示し、各チームにおける協働的な学びによる授業設計を意識づけた。

3回目は、各チーム順番に協働して作成した指導案による模擬授業とその反省会を行った。教材の使い方や指導の流れなど、授業設計力と授業運営力の両面から各チームの模擬授業のよい点と悪い点を受講生全体で検討させた。また、他チームのよい点は自チームに取り入れるように指示した。

4回目は、チームの最終指導案と授業で使用する図表やワークシートを作成させた。また、チーム内で1時間の授業の中で主となって担当する部分を決めるように指示し、役割分担を明確にした。筆者は最終指導案やワークシートをチェックし、発問や指示で曖昧な部分や、児童に伝わりにくい部分をアドバイスし、各チームに再考させた。再考後の指導案とワークシートを協力校である西が丘小学校に提出し、4年生の各クラスの担任教員に指導案の内容のチェックを依頼した⁸⁾。

表3は、A~Dの各チームの指導案に示された項目と自動車の模擬体験の活用法を示している。全チームとも模擬体験を授業の展開に位置づけ、そこから交通安全について児童に考えさせようとしている。

表3 各チーム（A～D）の指導案の項目と自動車の模擬体験の活用方法

	指導案の項目	自動車の模擬体験の活用法
1限：4年4組 Aチーム(3名)	①交通事故の原因, ②模擬体験(交差点確認), ③気づいたこと発表(死角の説明), ④ 今後の行動	車移動, 左折時の車からの自転車見え方 [運転手]
2限：4年3組 Bチーム(2名)	①交通事故の経験と原因, ②模擬体験(体験順確認), ③ 気づいたこと発表(死角の説明)	車停止, 左折時の車からの歩行者の見え方 [運転手・歩行者]
3限：4年2組 Cチーム(2名)	①交通事故の現状, ②事故の原因, ③模擬体験(ルール確認), ④ 気づいたこと発表(死角の説明)	車停止, 車の死角を確かめる [運転手]
4限：4年1組 Dチーム(2名)	①交通事故経験, ②運転席の意識, ③模擬体験, ④感想発表, ⑤事故原因確認, ⑥ 交通事故を防ぐ	車移動, 左折時の車と歩行者の接触 [運転手・助手・歩行者]

※[]は児童の活動, 斜め太字は指導案では計画していたが, 時間がなく簡単な説明で終わった部分. 筆者作成

学生Xの教育実習時の課題は, 自動車の模擬体験をしている以外の大多数の児童が学びに向かっていないことであった。また, 授業の中核となる模擬体験活動が自動車の運転席からは周りがどのように見えるのかの事実確認に留まることであった。このため, B・Cチームは車と周りの状況をしっかり観察し, 車からの死角を確かめることに重点をおくように改善している。A・Dチームは学生Xの教育実習時の指導案とは異なり, 自動車を移動させ, 実際に自転車や歩行者が見えるのかに重点をおき, 今後, 児童が歩行者や自転車に乗ったときに交差点でどのように行動していけばよいのかを考えることができるように改善している。

5回目から8回目は, 各チームが担当クラスで最終指導案を基にした授業を実施し, その時間に授業担当となっていない受講生は授業を参観し, 授業後に受講生全員で振り返りを行った。

表4は学生Xが所属しているBチームの最終指導案である。教育実習時の指導案からの改善点がわかるように示している。学生Xの教育実習時の指導案では, 導入で, 前時の学習を踏まえて自動車の不注意以外の原因を児童に考えさせるようになっていた。

Bチームのチーム指導案では, 児童の経験から歩行者として交差点を渡る際の危険を意識させ, 自動車からの見え方についてより着目させるようになった。展開で, 体験する児童以外は, ワークシートに体験の予想や気づきを書かせるようになり, 児童が単に見るだけの活動の時間を改善している。学生Xは, まず教育実習時の反省を生かして, 見学する児童の静的な活動を改善しようとしたことがわかる。

Bチームの模擬授業後の最終指導案では, 導入で自転車と自動車の事故の映像を見せるようになった。この映像を踏まえ, 児童の経験を引き出した上で, 交通事故が起こった原因を考えるように改善された。これは, Bチーム内での話し合いにより, 自動車からの見え方を重視したためである。また, 図1のように, 教育実習時の静止

していた人形の代わりに, 運転手を模擬体験する前後の児童が交差点内を動き回るように設定され, より交差点の現実に近い, 動的な児童の活動の時間を増やすように工夫している。また, 学生Xの提案により, 受講生全員で共通で使用するダンボール自動車にハンドルやミラーをつけて本物に近づけたり, 信号や横断歩道を作成し, 活用することによって模擬体験の臨場感を出そうとした。このように中核となる活動を改善していこうとする姿勢が見られる。

Bチームの模擬授業を経た最終指導案では, 模擬体験の動きを実際に指導者としてクラス全体に説明すること, 児童全体への指示を黒板に貼ること, 体験中の児童に適宜指導することが意識されるようになった。Bチームの授業実践では, 自動車の模擬体験の際に, 体験する児童, 待機する児童, 動き回る児童に適宜指示を出していた(写真1参照)。他チームも, より教育現場に対応できる授業案を作り上げていった。これらのことは, 各チームが模擬授業を行い, チームでの反省とともに, チーム間で討論を行うことによる協働的な学びにより改善されたと考えられる。

9回目は, 筆者も含め, 受講生と4クラスの担任教員との授業の反省会を行った。受講生は体験活動は充実させることができたが, 安全な生活に向けて十分な振り返りができなかったことをまず反省点として挙げた。4人の担任教員は, ワークシートは活動とのつながりを意識して作成すること, 活動内容や目当ては明確に児童に伝え, 指示は一つ一つ丁寧に行い, 児童の考えを適宜拾い発表を促すことなど, 授業設計と授業運営の両側面から受講生にアドバイスをした。

10回目は, 5回の教職共通の学びの後で, 授業実践後に受講生の振り返りシートをもとに, 改善指導案・チーム指導案・最終指導案・授業実践・反省会のそれぞれの段階でどのような力がつき, 反省点があるのかを受講生に話し合わせた。また, 授業実践後の5回の教職共通と社会幼小の学びとの関連性を考えさせた。

表4 Bチームの社会科学学習指導案

<p>目標：簡単な模擬体験を通して自動車から歩行者はどのように見えるかを<u>つかみ</u>、<u>交差点における</u>交通事故がなぜ起こるのか考えることができる。</p> <p>準備物：指導者…(各チーム共通)ダンボール自動車、交差点の再現(信号機・横断歩道・コーン等)、映像資料(各チーム選択)自動車の死角に関する資料(掲示用)、ワークシート、タイマー 児童…社会科ノート、筆記用具</p>		
学習活動及び指導者の働きかけ	予想される子どもの反応	資料等
<p>1. 交通事故を意識する。〔X担当〕15分</p> <ul style="list-style-type: none"> 自転車または歩行者として交差点を渡る際に、危険を感じたことがないかを問う。 [自動車からの見え方について問う。] 自転車と自動車の事故の映像を見せる。 <p>○「交通事故はなぜ起きてしまうのでしょうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> 意見が出た後で、運転手から自転車や歩行者は見えているのかを全体に確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「交差点に車が突っ込んできそうだった」 「車が猛スピードでまがってきた」 「角の見えないところから車が出てきた」 映像から交通事故をイメージする。 「車の人が自転車を見ていなかった」 「自転車の人は運転手が見ていると思った」 「自転車のスピードが速かった」 「運転手には自分達のことが見えていないのでは」 	<ul style="list-style-type: none"> 映像
<p>2. 模擬体験を行う。〔X・Y担当〕25分</p> <ul style="list-style-type: none"> 指導者が模擬体験の動きを行い、生徒に模擬体験の方法を説明する(グループで、1人が運転席、2人が歩行者役、1人が待機)。 [体験する人の前後が人形を動かす。] 体験をした上で気づいたことを後で発表することを伝える。 クラスを2つのグループに分け、左折中のダンボール自動車に入り、歩行者はどのように見えるのかを模擬体験させる。 体験の時間は1人1分(全体で20分)で、素早く交代することを伝え、適宜指導する。 ワークシートを配布し、体験グループ以外は気づきや感じたことをメモさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 実際に運転手からの歩行者の見え方をとらえるためにダンボール自動車に入り確かめる模擬体験を行うことをつかむ。 なにかつかめるのかを意識して体験にのぞもうとする。 「このフレームが邪魔で全然見えない」 「あれ、歩行者が見えないぞ」 「車からだこんなにも見づらいんだ」 「向こう側にある車と歩行者は見えるのに、近くの歩行者は見づらい」 自分が体験して気づいたことや他の班の体験を見て気づいたことを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 赤と黄の自動車模型 [人形] 交差点の再現 ワークシート
<p>3. 気づいたことを発表する。〔Y担当〕5分</p> <p>○「体験をして気づいたことを発表しましょう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 体験の中で気づいたことを発表させ、全体で話し合いを行う。 <ul style="list-style-type: none"> なぜ、事故が起こるのかについて、自動車の死角に関する資料を掲示し、説明を加える。 歩行者として気をつけていくべきことは何かを問いかけ、確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「歩行者からだで見えていると思う位置でも自動車からは見えないことがわかった」 「遠くにいる子は見やすいが、近くにいる子は見ることができない」 「自動車には死角があるから歩行者のことが見えずに突っ込んでしまうのではないか」 歩行者は自動車から見えていると思っているが、自動車には死角があり、見えない場合がある。 「もしかしたら、見えない部分(死角)に入らなければ大丈夫なのかもしれない」 	<ul style="list-style-type: none"> 自動車の死角

※Xは教育実習で実践した学生。〔 〕は教育実習時のみの活動や働きかけ、下線は教育実習時からの表現変更、斜線太字は付け加え。Bチーム最終指導案を教育実習時と比較できるように改変して作成

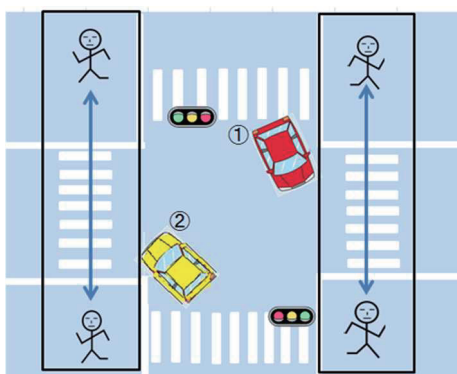


図1 Bチームの模擬体験の設計



写真1 Bチームの模擬体験を指導する様子

4. 授業実践力を高める視点からの分析

4. 1. 授業実践力に関するアンケート

授業実践後に受講生に授業実践力に関するアンケートをとった。各項目で、a: とても思う=4ポイント、b: 思う=3ポイント、c: あまり思わない=2ポイント、d: まったく思わない=1ポイントを選択させた。表5はアンケートの項目と結果を示している。

表5 事後アンケート結果(9名)

	アンケート項目	平均値	標準偏差
1	授業の準備・実践を行って、さらに工夫した授業を行いたい。	3.44	0.50
2	授業の準備・実践を行って、さらに授業に対する考え方が深まった。	3.33	0.47
3	授業の準備・実践を行って、さらに授業実践力が身についた。	3.11	0.31

項目1は教職実践演習後にさらに授業を改善していきたいのかの意欲をみようとしている。平均値が最も高く、受講生は教職実践演習で課題を見つけ、授業を改善する意欲が高まったことがわかる。項目2は授業実践力に関連して受講生の授業に対する意識が高まったのかをみようとしている。平均値が高く、受講生は教職実践演習における一連の学び合いを踏まえた改善授業の実施により、授業に対する考え方が深まったことがわかる。項目3は授業実践力がさらに育成されたのかの受講生の自覚をみ

ようとしている。平均値は3を超えており、受講生は授業設計力や授業運営力が身についたと考えている。

事後アンケート結果から、受講生は授業の目的・内容・方法の重要性や授業実践力の形成をより意識するようになった。本教職実践演習のプログラムは、教育実習を基盤として、受講生が授業実践力を意識し、さらに授業実践力を高めることができたといえる。

4. 2. 授業実践力の振り返りシート

授業実践後に受講生に授業実践までの9回分の授業をふり返らせた。表6は本教職実践演習プログラム3回目・4回目と関わり、模擬授業を実施し、その課題を改善して最終指導案を作成するという学生の学び合いの成果が期待される教材作成段階で、指導案をさらにどのように工夫して改善していったのかを問い、授業実践力と関わる学びを分析したものである。

Aチームは、模擬体験の場面設定や自動車の死角から授業内容の精選を意識している。Bチームは、交差点の再現など模擬体験場面の設定と学びを意識している。Cチームは車からの見え方について予想することを意識し、ワークシートを充実させている。Dチームは模擬体験と関連づけた導入や主発問や振り返りを意識している。

学生同士の学び合いにより、教材の活用方法や場面設定、授業内容のまとめ方、授業展開など、授業設計を中心に授業実践の意識が高まったことがわかる。

表6 チームの改善授業の提案による受講生の学び

模擬授業後、チームで再改善指導案(最終指導案)を提案するときどんな工夫をしましたか。	
Aチーム	<ul style="list-style-type: none"> ○授業のメインである模擬体験が甘く、場面設定、模擬体験の進め方をしっかり考え、初めて見た人でもわかりやすく模擬体験の様子が伝わる指導案を書こうと心がけた。 ○模擬体験をより具体的にするように話し合った。車と歩行者でなく普段の使用頻度の多い自転車と車という設定にして、死角から飛び出すという危険性を伝える工夫をした。 ○内容が盛りだくさんの授業だったので時間配分をどうするか再度考えた。その結果、児童が自分の体験を振り返る項目と、死角に関して学べる項目の二つに絞りわかりやすいものとなった。
Bチーム	<ul style="list-style-type: none"> X: チームで模擬授業を重ね、スムーズな授業展開を計画した。交差点を再現するというので、原型にミラーや横断歩道を付け加えていくことでよりリアルな模擬体験を企画することができた。 ○模擬体験の時に歩行者が様々なところに行かないように黒いテープで動く範囲を限定し、より運転席から死角が確認しやすいようにした。また、ワークシートにどんなことでも書けるよう「感じたこと、気づいたこと」という枠に変更した。
Cチーム	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートに、見えるコーンと見えないコーンを予想する欄を設けて、体験する前と後で、車の外からと中からは見え方に大きな違いがあることに気づくように工夫した。○×クイズの内容と授業と関連させて、楽しみながら解けるようにした。 ○地図をよりわかりやすくするため、津駅の位置を記した。ワークシートに関してはタイトルを付け、予想を記入する欄を新たに作った。
Dチーム	<ul style="list-style-type: none"> ○いかに模擬体験に時間をとるか、体験を生かした導入、まとめにするにはどうすべきかなど体験を中心に指導案を作成した。それぞれが提案した部分をそれぞれが授業で担当することにした。 ○模擬体験の時間を十分に確保できるように、導入部分の簡素化と模擬体験への動機付けができるような主発問の設定をした。「楽しかった」で終わらせないように、運転手からの見え方を意識すること、車は急には止まれないことを体感することを子どもたちに明確に説明できるようにした。

※表現を一部省略した。下線 は授業設計、下線 は授業運営に関わる学び、Xは教育実習で実践した学生を示す。筆者作成

表7 授業実践による受講者の学び

完成したチームの指導案・教材を活用して授業をしてみよう思いましたか。	
A チーム	<p>○車のフロントミラーやサイドミラーを使って注意深く自転車を見ようとする児童を見て、授業に欠かせない教材は手作りで触れさせたい。盛り込むと授業の目標がわからなくなる。一貫性と一番のねらいを考えて授業をすっきりさせた方がよい。運転手だけを体験させてもよかった。</p> <p>○児童の反応はとてよく、有意義な授業を行えたと思う。しかし、体験を行う前の注意事項の説明不足もあり、ふざける児童も出てきてしまったのが反省である。</p> <p>○映像がうまく映らず時間も短いという状況に関しては割としっかりした授業を展開することができた。しかし、体験活動が遊びのようになっている児童が何人かいて、私たちの説明や児童の意識のまとせ方が甘かった。</p>
B チーム	<p>X：一つ一つの時間に力を入れたため、時間配分に手間取った。一人ひとりに均等な時間で模擬体験を行わせることができた点よかった。気付きや感想を共有する時間は大切にしたい。</p> <p>○体験の説明までに時間がかかってしまい、まとめの時間がなくなってしまった。また、黒いテープを付けたことで生徒の動きセーブしてしまい死角を発見するのを妨げてしまった。</p>
C チーム	<p>○体験時間の1分が長すぎた。45秒でよかった。また、事前に言うておかなければ伝わらないであろう事が多く、何でもかんでも説明しがちになってしまった。次の人を車の後ろで待たせ、素早く交代できるようになれば時間をもっと短縮できたと思った。</p> <p>○思ったより時間がかかってしまい、最も大事な死角についての説明ができなかった。</p>
D チーム	<p>○一番気がかりだった体験の時間の充実はうまくいったと思う。子どもたちに目標が伝わったのではないかとワークシートを読んで感じた。ただ、もっと子どもたちの深い意見をまとめの場面で引き出したかったし、子どもたちの意見をうまくまとめにできなかったことが反省点である。</p> <p>○指導案通りに授業展開できたことは評価できる。模擬体験の時間と、子どもの感想や全体交流する時間を十分に確保できたことは子どもたちの理解につながったと思います。しかし、一方的に話しすぎてしまったこと、感想のまとめができなかったことが反省です。</p>

※表現を一部省略した。下線 は授業設計、下線 は授業運営に関わる学び、Xは教育実習で実践した学生を示す。筆者作成

表7は本教職実践演習プログラムの5回目から8回目にあたる各チームで授業を行った成果を問い、授業実践力と関わる学びを分析したものである。

A チームは、児童に興味・関心を引き起こす教材の大切さやねらいを見据えた授業内容の精選の必要性や児童への指示の徹底について意識している。B チームは、模擬体験の時間と場面設定とともに、模擬体験を基にした児童が共有する学びの時間の大切さを意識している。C チームは、事前指導の在り方や模擬体験時間を短縮するようなローテーションなど児童への対応を意識している。D チームは、模擬体験を核とした授業時間の配分とともに授業の展開として体験後の児童の意見のまとめ方を意識している。

表6と比較して、表7の授業実践後の段階になると、受講生は授業設計と授業運営を関連させて記述していることがわかる。受講者全員の協働的な学びによる授業実践と現場の教員との授業実践後の反省会による学び合いにより、授業内容の精選、活動の振り返りの明確な位置づけという授業設計と、児童への指示や対話、的確な対応の必要性、時間配分などの授業運営の両側面から授業実践の意識が高まったことがわかる。

5. おわりに

教員をめざす学生は、教育実習後に、教育現場と関わって授業実践力を育成するような機会に恵まれているとはいえない。また、3年次や4年次の教育実習で行った授

業は、教職員と実習生による授業検討会後は放置されているケースが多い。

本稿では、学生の協働的な学び合いにより教育実習で行った授業を改善し、改善した授業を教育実習と異なる環境で実践するという、教育実習を基盤とした教職実践演習プログラムを提案した。2013年度の教職実践演習は、教科力を生かした授業改善に向けた学生同士の学び合いや教育現場での改善授業を実施する過程を充実させて、受講生に授業実践力を意識させ、教育実習時よりさらに授業実践力を高めることができた。

2013年度の教職実践演習は、先行プログラムの課題を克服するために、学生同士の協働的な学びを通して、授業設計と授業運営に関する実践的な学びを可能にする授業実践力を高めるモデルプログラムとして評価することができる。

2013年度の教職実践演習では、学生のより協働的な学びを高めていくこととともに、現場の教員とのさらなる協働的な学びを深めていき、より教育現場に即した授業を行っていくことが課題として残った。より授業実践力を高める教職実践演習プログラムとなるように、2014年度以降の教職実践演習で上記の課題を徐々に克服していくように改善していった。

2014年度は、3年次の教育実習で社会科教育コースの学生が開発した小単元「おさかな天国日本！～マルシン水産から学ぶ」（8時間）の内容を改善した⁹⁾。受講生が教育実習で行った複数の単元の中から、改善したい授業

を受講生に選択させた。第1～2時で日本の水産業が盛んな理由と水産物が私たちの手元に届く流れをとらえるようになっていた。この2時間の指導案をベースに、1時間分の指導案となるように内容を取捨選択した。また、教育実習時の教材ばかりでなく、新しい教材を使用できるように改善した。9名の受講生は西が丘小学校の第5学年の4クラスに分かれて授業を行った。授業後の担任教員のアドバイスから、授業づくりの視点、児童への対応、時間配分、資料提示などを意識することができた。各クラスの授業構成や使用教材を柔軟に設定できるように改善したことにより、特にチーム間での協働的な学びが深まった。

2015年度は、3年次の教育実習で社会科教育コースの学生が開発した小単元「大門商店街活性化計画」(全8時)を改善した¹⁰⁾。社会科の販売の学習の特設授業(1h)として位置づけ、7名の受講生は西が丘小学校の第3学年の4クラスに分かれて授業を行った。教育実習では、8限目の大門商店街を活性化させる解決の方法を考える部分が不十分であった。そこで、1～7時間目の大門商店街の様子を踏まえ、8時間目を核とする内容の範囲で新しい指導案を作成した。実際に現場(大門商店街)を調査することで、教材に対する新しい発見ができ、チームとしての連帯感も生まれ、チーム内での協働的な学びが深まった。また、授業前に各チームが担当するクラスの授業参観を行うことで、クラスの雰囲気をつかむことができ、2014年度と比較して、より教育現場に即した授業実践が可能となった。

2016年度は、3年次の教育実習で社会科教育コースの2人の学生が開発した小単元「事故をふせぐための工夫」(全8時)の2つの授業をベースに、社会科の交通安全の特設授業(1h)として構想した¹¹⁾。8名の受講生は西が丘小学校の第4学年の4クラスに分かれて授業を行った。2015年度と同様に、授業の大枠の内容を決め、授業の流れや学習活動や使用教材は各班で工夫することを確認し、受講生は改善指導案と教材を作成した。受講生はチームごとに西が丘小学校区の道路の調査を行った。また、授業参観の時に、担任教員との最終指導案の検討会を導入した。このことにより、2015年度と比較して、現場の教員との協働的な学びが深まり、受講生は実際の子どもたちにどのように対応していくのかについて強く意識することができた。

2014年度から2016年度の教職実践演習では、2013年度のプログラムをベースに、より協働的な学びや教育現場に即した実践となるために、使用教材に柔軟性をもたせ、授業参観や現地調査や担任教員との事前の指導案検討会を取り入れていった。

2013年度から2016年度の教職実践演習では、担任教員との事前や事後の授業検討を経て、受講生は主に次のような授業実践力に関わることを意識できた。

- 子どもの発言に対し対応できる力
- 資料の教材研究を深め、効果的に提示する力
- 授業にメリハリをつける指示(書く・聞く・発表)
- 丁寧に板書する力
- 子どもが教材や説明をイメージできる例え
- 児童とのコミュニケーション力
- 活動のつながりを意識した授業づくり

2016年度は2013年度と同様に交通安全に関わる小単元の内容を取り上げた。2013年度は交差点で交通事故が発生する理由である自動車からの死角について、児童が実感しやすいように模擬体験活動を取り入れた。2016年度は、児童が通っている西が丘小学校周辺の交差点の事故を防ぐための工夫やそれらの働きを考えるために、カーブミラーやガードパイプなどの設備を教材として取り上げた。教育実習時の指導案の内容や授業でどこを取り上げるかにより、受講生の学びも変わる。

教育実習を基盤とした教職実践演習において、教育実習時の指導案を学生同士の協働的な学びの中で改善し、実践すること、現場の教員との協働的な学びを充実させることなどから、受講生は教育実習後に授業実践力を改めて意識し、高めることができた。

教職実践演習において授業実践力をより高めるために、学生同士の協働的な学び、学生と現場の教員との協働的な学びを充実させていく方策を考えていきたい。

注

- 1) 三重大学教育学部が2014年3月25日に卒業生に向けて実施した「教育学部が取り組むべき課題についてのアンケート」の結果を参考にした。
- 2) 永田(2012)では、「教科内容に関わる学力による教材研究をもとに、授業において実際に児童・生徒の学習意欲を引き出すことのできる力」と定義していたが、本稿ではこれらを簡潔な表現で構成する力として定義し直した。
- 3) 学生の授業実践力を磨くとともに、協力校の西が丘小学校の教員の自己の授業実践力、特に授業設計力を再検討するという、学生と現場の教員とのお互いの研修の機会として、2016年まで継続してきた。
- 4) 三重大学教育学部附属小学校の教育実習では、実習生は担当教科の単元について、通して授業を行う。
- 5) 6名のうち4名が1クラスを担当して授業を行った。3年次に教育実習を行った学生は所用で参加できず、他の1名は授業の補助をした。この連携授業については三重大学教育学部(2013)にまとめている。

- 6) 詳しくは三重大学教育学部カリキュラム特別委員会(2014)にまとめられている。
- 7) 4年次のみ教育実習を経験している人文学部の学生は、内容と実施時期と受講人数のバランスを勘案して、教職実践演習の幼・小か中・高を選択した。
- 8) 各クラスの担任教員に授業設計についての意見を求めたが、特に改善点はないということであった。
- 9) 三重大学教育学部(2014)にまとめている。
- 10) 三重大学教育学部(2015)にまとめている。
- 11) 三重大学教育学部(2016)にまとめている。

参考文献

- 片上宗二・柳下則久編(2008)『小学校学習指導要領の解説と展開 社会編』教育出版, 33.
- 中央教育審議会(2006)「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」文部科学省.
- 永田成文(2012)「教育実践力の育成をめざした教育実習後の教員養成教育の一試案—教職実践演習を見据えた社会科における隣接学校園との連携—」三重大学共通教育センター『大学教育研究—三重大学授業研究交流誌—』第20号, 11-16.
- 長友大幸・中込雄治・生野金三(2010)「教職実践演習の実証的研究—教員としての資質能力の基礎の育成を志向して—」埼玉学園大学紀要人間学部篇第10号, 180.
- 長谷川康男(2006)『子どもが社会科で問題意識をもつ10のポイント』学事出版, 13.
- 藤田達生・永田成文・川端康(2010)「教員養成段階の『教科力』育成のためのカリキュラム開発」『日本教育大学協会研究年報』第28集, 202.
- 三重大学教育学部(2013)『一身田・橋北校区との連携活動』平成24年度報告書, 15-18.
- 三重大学教育学部(2014)『一身田・橋北校区との連携活動』平成26年度報告書, 15-16.
- 三重大学教育学部(2015)『一身田・橋北校区との連携活動』平成27年度報告書, 16-18.
- 三重大学教育学部(2016)『一身田・橋北校区との連携活動』平成28年度報告書, 18-20.
- 三重大学教育学部カリキュラム特別委員会(2014)『2013年度三重大学教育学部「教職実践演習」実施報告書』.
- 渡辺克己(2011)「教員養成の充実に関する一考察—期待される教師の育成を目指して—」北里大学一般教育紀要16, 128-133.

SUMMARY

In the “Seminar on educational practice” for social studies(kindergarten and elementary level), in 2013, student teachers improved upon the teaching plan made by practice-teaching and implemented it in a cooperative school. The purpose of this research is to confirm whether the proposed “Seminar on educational practice” based on student teaching does enhance the practical teaching skills of student teachers.

The teaching plan for social studies created by one of the student teachers implemented in the third year of university was improved upon by nine student teachers without changing the main teaching materials or the learning processes. Next, each student teacher proposed an improvement to the teaching plan, and based on the content of each of their plans, they were divided into four teams. After mutual discussions within each team, the student teachers created a single plan for each team based on the features of their individual plans. Each team performed simulation teaching after which the nine student teachers debated among themselves to further improve their teaching plans. Finally, after implementing the improved teaching plans in the cooperative school, the students got the classroom teacher's advice on improving their practice.

The responses to the questionnaire and worksheet clearly showed that the “Seminar on educational practice” based on student teaching enhanced students' practical skills in teaching, allowed them to cultivate their teaching skills, and promoted flexible approaches toward teaching.

KEYWORDS: Seminar on educational practice, practical teaching skills, student teaching, improved teaching plan, collaboration learning

† Shigefumi NAGATA* :Practice-teaching-based “Seminar on educational practice” to enhance practical teaching skills among student teachers: Improving and implementing teaching plans through collaboration

*Faculty of education, Mie university
1577 Kurimamachiya-cho Tsushi, Mie, 514-8507 Japan
(2017.10.30 受付, 2018.1.4 受理)